

IV-56

東北地方在住者からみた沖縄の魅力について

岩手大学 正 員 安藤 昭
 岩手大学 学生員 ○田村 大
 岩手大学 正 員 佐々木栄洋
 岩手大学 正 員 赤谷 隆一

1. はじめに

現在、生活様式や価値観の多様化が進み、地域間の格差も減少し、余暇時間が増加したなかで地域間交流の重要性が高まってきている。

そこで、東北地方と沖縄県の交流促進、活性化を図るため相方の魅力、訪問する際の問題点を明らかにし多様なニーズに応える空間の創出が重要である。

① 東北地方の概要

東北地方は、本州の北東部に位置し、東西約200km、南北約520kmの南北に連なる6県からなる地域である。地域の中央を縦貫する奥羽山脈、その西に出羽山脈があり、火山に基づく温泉や湖沼、また、太平洋と日本海に面する総延長3300kmの海岸線を持ち、港・海水浴場や、総面積の約9割が積雪地帯であり、スキー場など観光地の面からも注目を浴びている。

東北地方は豊かな自然に恵まれ、美しい山脈や峰を眺望することができる。また、日本を代表する海岸風景を展開している。

東北地方は、地理的条件などから、古来より他地方との交流の乏しく、僻地的傾向にあったが、現在では地方文化、伝統に培われた個性的な都市が点在する地域となった。近年、東北自動車道や東北新幹線の開業、空港の整備・拡充など、交流ネットワークの整備により、日本国内さらには海外との交流も活発になってきており、地域開発も進行している。

② 沖縄県の概要

沖縄県は、最南西端に位置し、東西1000km、南北400kmの大小160の島々からなる県である（有人島50）。

全諸島は、沖縄群島・宮古群島・八重山群島・に大別され、島としては大きな順に沖縄本島・西表島・石垣島・宮古島・・・となっている。

位置としては、九州と台湾はぼ中間にあたり、那覇～東京間を半径とする1500kmの円内には、上海・香港・台北・ソウル・マニラなど東アジアの主要都市があり、日本の南玄関といえる。この地理的条件を活かし、14世紀から16世紀にかけての大交易時代においては、中国や東南アジア諸国との親密な交流を行っていた歴史があり、沖縄独特の文化圏を築いてきた。

気候の面から見ると日本で唯一の亜熱帯海洋性気候に属し、年間の平均気温も約23度暖かく、沖縄独特の花々や木々、イリオモテヤマネコ、ノグチゲラなどの貴重な

野生生物、青い海など豊かな自然に恵まれている。沖縄独特の文化や自然は、多くの観光客を魅了し、近年は、国際観光リゾート地として注目を浴び、日本本土や台湾、韓国などから多くの観光客が訪れている。

また、沖縄県は第二次世界大戦以後、現在に至るまで米軍基地問題を抱えさまざまな活動をしている。

沖縄県では、今日、この地理的、歴史的条件を活かし、近隣アジア、太平洋諸国などと、経済・文化・学術などにおいて国際交流を積極的に進め、日本の南における国際交流の拠点として県づくりを進めている。

2. 研究の目的

本研究は、東北地方と沖縄県の自然・文化・風土を活かした地域間交流の活発化を図るため、沖縄の魅力創出のための研究を行うものである。東北地方在住者から見た沖縄県についての分析を行い、魅力となりうる要素、問題点を明らかにするものである。

また、現在、東北地方と沖縄の航空便において一年中運航しているのは、仙台～那覇間と福島～那覇間の南東北2空港のみで、北東北3県の青森・秋田・花巻の3空港においては平成9年から10年にかけて那覇便が開通したが、11月から3月の季節運航となっており、秋田空港においては平成11年度から休航中である。

そこで、東北地方の各空港から那覇空港へ、また、那覇空港から東北地方の各空港への利用促進、運休期間の運航が実現するよう調査・分析をするものである。

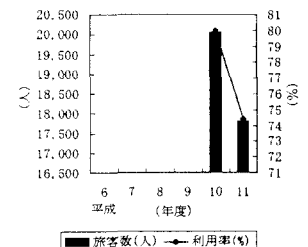
今回、この調査においては東北地方在住者から見た沖縄の魅力について、なかでも、かけはし交流の名目で農業面などで親密な交流を行っている岩手県在住者を中心に沖縄の魅力について調査したものである。

ここで東北地方各空港からの那覇便の運航状況について示す。

① 青森～那覇便

表—1 青森～那覇便の利用状況

	旅客数(人)	利用率(%)
平成10年	20,055	80
平成11年	17,802	74.4

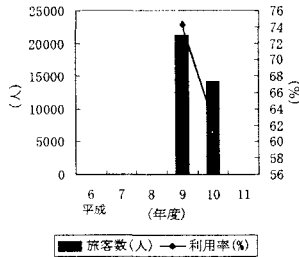


図—1 青森～那覇便の利用状況のグラフ

② 秋田～那覇便

表—2 秋田～那覇便の利用状況

	旅客数(人)	利用率(%)
平成9年度	21,225	74.3
平成10年	14,191	62.4
平成11年度		

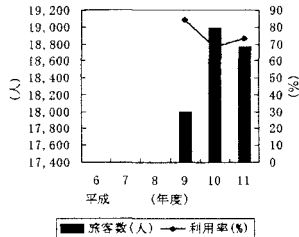


図—2 秋田～那覇便の利用状況のグラフ

③ 花巻～那覇便

表—3 花巻～那覇便の利用状況

	旅客数(人)	利用率(%)
平成9年度	17,992	84.2
平成10年	18,992	68.1
平成11年	18,763	73.4

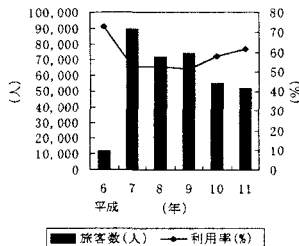


図—3 花巻～那覇便の利用状況のグラフ

④ 福島～那覇便

表—4 福島～那覇便の利用状況

	旅客数(人)	利用率(%)
平成6年	12,050	72.9
平成7年	89,352	52.4
平成8年	71,735	52.8
平成9年	74,286	51.4
平成10年	55,304	57.8
平成11年	51,550	61.5

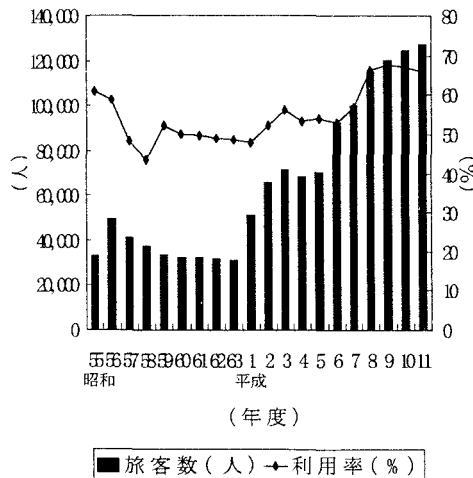


図—4 福島～那覇便の利用状況のグラフ

⑤ 仙台～名覇便

表—5 仙台～那覇便の利用状況

	旅客数(人)	利用率(%)
昭和55年度	33,252	60.8
昭和56年度	49,180	58.7
昭和57年度	41,382	48.1
昭和58年度	37,570	43.4
昭和59年度	33,662	52.1
昭和60年度	32,580	50.1
昭和61年度	32,268	49.6
昭和62年度	31,698	48.7
昭和63年度	31,211	48.5
平成元年度	51,309	47.8
平成2年度	65,785	52.3
平成3年度	71,601	56.1
平成4年度	68,161	53.3
平成5年度	70,567	53.9
平成6年度	92,362	52.8
平成7年度	99,982	56.7
平成8年度	115,092	66.4
平成9年度	120,126	67.8
平成10年度	124,611	67.1
平成11年度	127,406	66



図—5 仙台～那覇便の利用状況のグラフ

これら5空港の利用状況から、平成5年までは東北地方からの那覇便は1路線(仙台～那覇便)のみであったが、平成6年から順次新路線が開業された中で、仙台～那覇便の利用状況について注目すると新路線が開業したことにより、宮城県以外の利用客の他空港への分散化がおり仙台～那覇便の利用客の多少の減少が予想されたが、実際には、利用客は増加しており、他空港の利用状況を見ても利用客の多少の減少は見られるが横ばい傾向であり、依然として利用客の需要が大きいたことが分かる。このような点から見ても沖縄県の魅力となりうる要素、問題点などを調査し明らかにしていくことは重要であると思われる。

3. 調査の方法

東北地方在住者(主に岩手県在住者)において、実際に沖縄県を訪れたことのある人を対象に『訪問先』『訪問目的』『感銘を受けた点』『不満点』『花巻～那覇空港間の航空便について』のアンケート調査を行い、魅力となる要素、問題点を明らかにしていくものである。

アンケート調査の内容としては、あらかじめ抽出しておいた選択肢【訪問先(都市、観光地、行事など150項目余り)、訪問目的(自然景観を見る、文化財・史跡を見るなど11項目)、感銘を受けた点(自然風景、郷土料理など16項目)、不満点(ゴミ、交通機関、案内所など12項目)】から選び記入してもらうものとした。航空便に関しては航空便利用の満足度、空港施設の満足度などを5段階で評価してもらうものとした。

アンケートの配布・回収方法としては、実際に花巻空港において沖縄に出発する人に搭乗ロビーにおいて、また、沖縄から岩手に到着する人に到着ロビーにてそれぞれ配布し後日郵送による回収とした。

4. 調査の結果・分析

アンケートの調査・分析結果については十分な分析の終了後、当日、学会にて発表の予定である。

参考文献

インターネット 沖縄県・東北6県

ホームページ

岩手県庁「かけはし」交流5年の歩み

データ 全日空(ANA)

日本エアシステム(JAS)

日本航空(JAL)

注)データの都合上、福島～那覇便は年度区切りではなく、年区切りである。